09 開店！リストランテ アンナマリア

Ravioli di Ricotta
リコッタチーズ入り
自家製ラヴィオリ

テラスにテーブルを出して賑やかに食卓を囲むのが気持ち良い季節到来。友人や家族が集まるちょっと特別なランチの時に、皆が喜ぶラヴィオリの登場です。卵入りの弾力がある生地に、リコッタチーズとほうれん草を混ぜ合わせたタネを入れて包みます。仕上げに和える自家製トマトソースの酸味がリコッタチーズのホロ甘さと最高にマッチします。冷えた白ワインと楽しみたい！

たっぷりのリコッタチーズを
丁寧に包んでいます

陶器の盾、
いただきました。

News
ニュース

『アブルッツォ通信』の活動が表彰されました！

5月初め、アブルッツォワイン・コンソーシアムとアブルッツォ商工会議所貿易センターの共催で、ワインプロモーションイベントが開催されました。この催しのジャーナリズム部門「第４回Words of Wines」にて当誌も海外部門で賞をいただきました。

アブルッツォって??

アブルッツォは東にアドリア海を臨むイタリア中部の州です。ヨーロッパで「緑の州」と呼ばれるほど厳しくも雄大な自然に恵まれたアブルッツォ州。しばしばそこに暮らす人々は「強くて優しい人」と形容され、豊かな自然と代々受け継がれてきた独自の伝統文化が息づいています。

copyright(c) Regione Abruzzo

覚えておくと便利！
アブルッツォ弁講座 Lesson8

イ　ソ　イートゥ
J so' jit(o/a)〜.
(Io sono andato/a〜)
私は〜に行きました。

いつもコテコテのアブルッツォ弁でユーモアたっぷり＆弾丸で話続ける友達がよく使うので覚えた方言。主に冒頭に飛び出すこの言葉が聞こえると、"あ、どこかに行って面白いことがあったんだな"と耳を傾けます。最後の母音はほとんど発音しません。

発行

Andiamo in Abruzzo 〜アブルッツォに行こう〜
（アブルッツォ州情報案内・各種サービス取次・文化交流支援）
http://www.abruzzo-info.jimdo.com
E-mail：andiamoinabruzzo@gmail.com

Abruzzo Più〜もっとイタリア・アブルッツォ州〜
（アブルッツォ州情報発信サイト）
http://www.abruzzo.jp

『アブ通』データ配信中！
月刊『アブルッツォ通信』を
データでもご覧頂けるようになりました。
ご希望の方はこちらからお申込みください。
バックナンバーもコチラから
または
http://abruzzo-news.blog.jp/

Design／Midori Nakamura
※掲載の記事・写真・コンテンツ等の無断転載はご遠慮くださいますようお願い致します。

イタリア・アブルッツォ州の魅力を発信するニュースレター
Abruzzo 通信
アブルッツォつうしん
Vol.11 Giugno 2017
Andiamo in Abruzzo × Abruzzo Più 共同発行

聖顔布？！聖地マノペッロの"聖なる顔(Il Volto Santo)"

長い年月、マノペッロ（マイエッラの麓に位置する、ペスカーラから南西に約30キロの地域）に祀られた"聖なる顔（ilVolto Santo）"の存在は1640年に書かれた報告書以外には知られていませんでした。

マノペッロ聖堂

謎に包まれた一枚のベールは、反対側が透けて見えるほど薄い長方形の布で、そこに浮かび上がる様に描かれた苦しみに満ちた男性の顔は、伝承でも近年の研究によっても、キリスト教のシンボルであるイエスの顔だとされています。現在、このベールは２枚のガラスに閉じられ両面から見ることができ、うつすら浮かぶ顔は光の加減によって表情が変わるように見えます。

どの様に描かれたものなのか未だ謎に包まれ、芸術家たちが再現しようとする試みも叶わず、最新テクノロジーのレーザーを用いた研究では顔料が使用されていないことが解明されています。

これは2000年前、イエスの聖顔布であったものをエルサレムの墓から取り出してきたものなのでしょうか。このベールは聖女ヴェロニカで知られるローマにもたらされた後、「永遠の都は1527年に滅びた」と言われた"ローマ略奪"時期のローマを出て、千年に及ぶ旅の終着地となる16世紀のマノペッロに辿り着いたと思われます。当時ナポリ王国支配下であったアブルッツォで、その後何人かの手に渡りながらも聖顔布は安全に保管されてきました。

時を経て、聖骸布についての研究が進められる中で、1999年頃からようやくこの"Il Volto Santo"に注目が集まり、2000年以降、マノペッロは国際的な巡礼地のひとつとして巡礼者や旅人が世界中から訪れるようになりました。2006年9月1日には、当時のローマ教皇ベネデット16世がこの地を訪れ、大いに感動し"Il Volto Santo"の前でゆっくりと祈りを捧げました。

祀られた"I Volt Santo"

また近年、聖顔布の存在はフィリピンをはじめアジアのキリスト教圏でも著しく広まっています。去る2017年5月20日には、未来の教皇と目されているマニラのルイス・アントニオ・タグレ枢機卿がマノペッロを訪れ、安置された教会からマノペッロ旧市街にある聖ニコラ教会まで"Il Volto Santo"を運ぶ祭りの行列に参加しました。タグレ枢機卿は「フィリピンにおけるIl Volto Santoへの信仰は非常に高まっている。」と述べましたが、韓国やインドネシア、ベトナムなど、他のアジア諸国のキリスト教徒の間でもマノペッロを聖地として目指す人が増えていると言われています。

行列に参加するタグレ枢機卿（赤い聖服）

私が昨年発行した英語版の書籍『聖なる顔、マノペッロから世界へ』（写真）は、多くの証言やイメージを通して"IlVolto Santo"の再評価を試みました。この聖地は山の尾根に沿ってできた小さな村からわずか２キロ程離れたところにあり、町の喧騒を忘れて祈り、考えにふけるのに適した場所です。夏までにはマノペッロ聖堂の隣に巡礼者のための家が完成する予定で、世界から訪れる巡礼者をもてなす場所となるでしょう。（文：Antonio Bini）

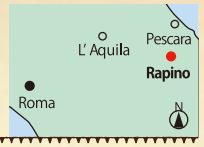
筆者著書

これまでの連載に加えて新連載が続々登場。アブルッツォをより深く身近に感じてくださいね。

アブルッツォの人とくらし その②

伝統サフランづくり アンナの新たな旅

アンナ・リタ・ディ・バンバ



サフランは13世紀にドメニコ会修道僧によってラクイラ県ナヴェッリに渡り、以来アブルッツォの経済を支え一大ブランドとして質の高さを誇っています。

アートスクールの運営はじめ、国内外で広く経験を重ねて故郷に戻ったアンナが新たに人生の伴侶として選んだのがサフランでした。

「私のルーツはここにあります。アブルッツォの大地や草木、マイエッラに暮らす人々と共に生きたいと思ったのです。」

サフランの名産地ナヴェッリで栽培に最適な環境や収穫と精製の伝統的な手法を学びながら、書物で紀元前まで遡り、古代から愛用されたこのスパイスの治癒力や歴史を研究した彼女は生まれ故郷に隣接したラピーノで栽培を始めました。

「最高級のサフランを作るのに必要なものはアブルッツォの大地と受け継がれた伝統だけです。花が咲き始める10月の夜明け、世界が目覚める情景を体感しながら畑に向かうと、花が収穫時期を教えてくれます。夜気をしのいで閉じた花びらから真紅の雌しべが突き出した花を選んでひとつずつ手で摘みます。３本の雌しべを丹念に花びらから離すとふるいに並べてオーク、アーモンド、オリーブの薪を使って乾燥させるのです。」 ↗

1本1本丁寧に採取されるサフラン

B&Bでもある自宅で。愛犬のキラルと

自然のリズムに従った重労働にくじけそうになりながらもオフィスのルーティンワークでは感じられなかった人間の力と日々の新鮮さを見出したアンナは続けます。

「ここに戻り自然の偉大さや悠久の歴史の前に私たちはごく些細な存在だと感じました。大都市を回り視野が広がったからこそ故郷アブルッツォの小さな村の価値がわかったのです。土に触れて自然と対話し作業に没頭していると、日々変わる空気の新鮮さや受け継がれてきた人間の役割に気づいて畏敬の念を覚えます。」

ジャラール・ウッディーン・ルーミーを愛読する彼女は人生を旅に例え、支度が整った今、出発地点に戻り自己描写するための新たな旅を始めたばかりだと語ります。

「サフランとの出会いは一期一会。自然が育む貴重な恵みを日々の労働と受け継がれた知恵を駆使して価値を高めるのが私の使命です。サフランを通して私が得た哲学を人間世界中の人々と共有したいのです。」

Racconti SUL VINO

アブルッツォワインにまつわるエトセトラ

VOL.1 ダヌンツィオも飲んだ伝説のワイン『MAHARE』マーレ

小さな頃、祖父が白い髭を生やした老人マーレの話を聞かせてくれました。

「その老人は魔術師と呼ばれていた、未来を予言出来たのだよ。」

老人マーレは私の町ファーラF.P.の川畔に住み、ペスカーラ出身の偉大な詩人ガブリエレ・ダヌンツィオと親交があったと言います。1900年代始めインスピレーションを求めてマイエッラに籠ることのあったダヌンツィオは、水を補給する泉で呪文がびっしり書かれた古い本を瞬時に読む不思議な老人を見かけ好奇心を刺激されたのでしょう。

「ダヌンツィオはこの町を通るたびマーレの家を訪ねていた。マーレが作ったワインを飲みながら話し込んでいたようだ。」

ガブリエレ・ダヌンツィオ

祖父の死後、私は学者達とダヌンツィオの作品を研究し始め羊飼い一家の結婚式から始まる「イオリオの娘」(1903年夏)の一節に"未来を告げるファーラの老人"という言葉を見つけたのです。

*"E la scapola mancina per Ustorgio l'abbiamo serbata, per **il vecchio della Fara che ci fa la profezia.**"*

同時に老人マーレがダヌンツィオに振る舞ったというワインを再現する研究を進め、バイオダイナミクス農法でクローンのモンテプルチャーノ種サン・ピエトロ・パオロを栽培してアパッシメントのワインに仕上げました。

私の土地に伝わる、人々が自然の神秘を畏怖していた古き時代のエピソードを形に残したかったのです。魔術と芸術が交差した情景に思いを巡らせながら独特な芳香と強い甘みを味わってください。"マーレ"、このワインにこれ以上ふさわしい名前はないでしょう。(語り手：ニコ・チャヴァリーニ／Fara Filiorum Petri在住・アグリツーリズモ経営者)

ロベルタ・ディ・ファビオ
(地域マーケティングコンサルタント)

ラクイラの今を伝える

ロベルタのラクイラ通信 Vol.2

L'Aquila Now

広場で手づくりのかごを売る女性（上）、国立博物館前も賑わっています（撮影本人）

イタリアでは5月１日の労働者の祝日には、どこのまちでも広場を中心にコンサートや演説会、市場などが開かれ賑わいます。震災から8年を経たラクイラでも、今年は久しぶりに以前の活気を取り戻したような1日になりました。震災前、朝市が開かれていたまちの中心にある広場には市場が登場し、手づくりのカゴや陶器、採れたての野菜など地元の品々が並びました。メインストリートのウンベルト１世通りは気ままに散歩する人や音楽隊の行進で賑わい、国立博物館前でも暖かな日差しの下、芝生に寝転がる若者や催しに参加する人たちが思い思いに楽しんでおり、そんな光景を目にし、失っていた当たり前の幸せを実感することができました。 つづく